

アウグスティヌスにおける靈的質料の問題

— 『創世記』冒頭の解釈をめぐる —

河野 一典

I 序 論

アウグスティヌスは『告白』XI巻において『創世記』冒頭の一節「はじめに神は天地を造り給うた」の「はじめに」in principioの解釈に着手し、マニ教徒の反問を契機に有名な時間論を展開する。そして引き続くXII巻では「天地」caelum et terraの解釈を施し、至福の知性的被造物及び無形質料についての考察を加えている。それら一連の議論の中で彼は多様な解釈の可能性を認めながらも、「はじめに」に関しては、(1)時間の始めに、(2)第一に、(3)御言たる始原において、という三つの解釈について述べている。また同様に「天地」は何を意味表示しているかという問題において、被造的世界全体を靈的被造物と靈的被造物の無形質料、物体的被造物と物体的被造物の無形質料という四つの部分に大別していることが看取される。

そして『告白』XIII巻では、かなり強い調子で『創世記』の引き続く第2節、第3節を次のように解釈している。ほぼ同時期に書かれたと考えられる『創世記逐語註解』I巻も参考にしながら、アウグスティヌスの解釈をまとめよう。

「見られず整わない地」とは物体的質料を、また淵の上にあった「闇」とは靈的質料を意味表示している¹⁾。靈的質料とは創造主に向き直り *conuerti* せずに己れの内にありうる靈的な生、他方物体的質料とは視覚とかその他何か身体的な感覚によって知覚される物体の形象 *species* が既に存在する時、その形相づけられた質料において現われるあらゆる物体的性質が欠如したものと理解される²⁾。言い換えれば暗闇の淵は、創造主に向き直っていない生の無形の本性であり、その生は創造主に向き直るという唯一の仕方では形成され、その結果それは淵ではなく、照らされ暗闇ではなくなる。暗闇とは光の欠如であり、靈的被造物が神たる不変で非物体的光へ向き直る時、

光は満ち溢れるのである⁵⁾。かくして『創世記』第1章3節の「そして神は言った、『光あれ』すると光が生じた」と言われている「光」とは靈的被造物が無形の生から創造主へ向き直り、神たる光によって照らされ、形成 *formare* されたことを意味する⁴⁾。

この向き直りによる靈的被造物の形成について更に詳しく見よう。靈的であれ物体的であれ、無形質料即ち不完全なものは、真にそして常に存在する創造主への固有の向き直りに応じて形相を受取り、完全な被造物になる時、常に父と一体である御言の完全な在り方 *forma uerbi* を模倣する *imitari* と言われている⁵⁾。そしてこのような靈的被造物の在り方に関しては、靈的なものは無形であっても形相づけられた物体よりも優れているし、また物体的なものは無形であっても全くの無よりも優れている⁶⁾、また子としての御言にとって、存在することは生きることであるのみならず、また生きることは賢く至福に生きることであるのに対し、被造物は靈的で、知性的或いは理性的であるとしても、存在することが生きることであるようには、生きることが必ずしも賢く至福に生きることではない⁷⁾、と述べられてもいる。

従って『告白』XIII巻及び『創世記逐語註解』I巻においては、先に述べた四つに区分された被造物全体を存在の仕方に従って上位と下位に秩序づけ、更に靈的被造物を御言の下位に従属させ関係づけている⁸⁾。本論の目的は、アウグスティヌスが『創世記』解釈という作業の下で、先のような被造的世界の理解のみならず被造物と神との関係づけをも含めて、秩序ある整合的ないわゆるコスモロジーの構築に到った経緯を浮き彫りにすることである。そして被造的世界の区分からそれらの秩序づけへの移行行きにおいて、テキストに即して言えば『告白』XII巻から『告白』XIII巻並びに『創世記逐語註解』I巻への移行行きにおいて、『告白』XI巻の時間論の最終部に見られる人間の魂の至福論をも含め、XII巻の「天の天」の至福論の果たした役割、意義を確かめたい。

II 「天の天」の性格規定

『告白』XII巻においてアウグスティヌスは『創世記』冒頭の「天地」を解釈し、「天」とは「天の天」*caelum caeli* 即ち至福の知性的被造物のことであると解釈する。

天の天は何らかの知性的被造物である。それはけっして三位一体たる神と等しく永遠ではないが、神の永遠を分有している。また神の甘美な至福直観のために、己れの

可変性を強く抑えている。造られて以来けっして墮落せず神に固着し、時間の転変する変遷を超越している。このような被造物は天使であると考えられる。即ちここでは天の天に関して、(1)神と等しく永遠ではないが、神の永遠を分有すること、(2)神を至福直観していること、(3)可変的であるが時間的な変遷をのがれていること、以上の三つのことが結合し、互いに整合的な関係にあることが言われる。

〔1〕天の天が永遠ではないことをアウグスティヌスは再三強調して語っている。まず天の天は被造物である限りにおいて、始まり *initio* を持つ。しかし天の天は被造物のなかで見える限り、万物に先立って創造されたものとして、それより先に時間を見出すことはできない⁹⁾。その意味では被造物の内でも最も上位の位置を占めている。

またこの天の天は「知恵」*sapientia* と言い換えられているが、しかしその知恵は、父なる神と全く等しく永遠であり、それによって万物が造られ、その始原において神が天地を造ったところの「御言たる知恵」とは異なる。天の天は「創造される知恵」「照らされる光」「義ならしめられた義」であるのに対して、御言は「創造する知恵」「照らす光」「義ならしめる義」である。

そして天の天としての知恵は被造物である限り、神によって *a Deo* 存在するが、それに対し御言たる知恵は神から *de Deo* 生ずる。それ故天の天は被造物である限り、創造主と等しく永遠ではなく、始まりを持つが、それは時間の始まりではなく、創成の始まりである。というのもこの天の天以前のみならず、天の天においては時間が見出されないからである¹⁰⁾。

〔2〕天の天が至福であることは次の如くである。天の天にとって快樂の対象はただ神のみである。極めて強く持続する貞潔をもって、神を飲み干す。このような天の天の在り方は、常に神の前に現存することである。そして全心をもって己れを神へ仕えさせているが故に、人間の分散する精神の働きのように期待する未来を持つこともなく、記憶したことを過去へ投げ渡すこともない。従っていかなる変遷によっても変化せず、いかなる時間においても分散されていないという意味で、時間を超越する¹¹⁾。

しかるに神と等しく永遠ではないことは既述の如くである。このような天の天の在り方は、とりも直さず、後述する『告白』XI 巻の最終部においてみられるように、人間の生に求められる至福の状態と合致する。そして天の天が神の至福を直観されると言われるその認識即ち天の天における知性は、いかなる時間の変遷もないから、同時に、部分的にはなく全体によって、顕わに顔と顔を合わせて神を知るといふ仕方

でなされる¹²⁾。

〔3〕かくして天の天が時間の変遷を被らないという意味での非時間性は、後述する無形質料の非時間性と異なり、神の至福と結びついた意味での非時間性であるが、しかし天の天にはやはり可変性が内在している。従ってもし大きな愛によって神に結びつき、あたかも真昼のように常に神によって輝き熱くなっていなければ、暗闇となり冷えきってしまうのである¹³⁾。それ故天の天が時間のあらゆる可変的変遷を超越することは、それが造られて以来決して墮落することなく、神によりすがり *inhaerere*、神に結びついている *cohaerere* からである。このような在り方こそが、アウグスティヌスの求めて止まない至福である¹⁴⁾。

Ⅲ 無形質料の性格規定

アウグスティヌスは「地」(*Gen.* 1, 1.) 及び「見られず整わない地」(*Gen.* 1, 2.)、そして闇がその上にあった「淵」(*Gen.* 1, 2.) を無形質料と解する。無形質料とは、神がそれを形相づけ、区別することに先立つ何もない状態である。即ち闇とは光の欠如であり、無形質料が形相づけられていないことを意味する。従ってそこには色も形も物体も霊もなかった。しかし全くの無でもなかった。いかなる形もない何か無形のもの、それが無形質料である¹⁵⁾。

さて質料は形相ではない。形相づけられる以前の質料即ち無形質料は可知的形相ではなく（例えば生命とか正義のように）、物体の質料である。また可感的形相でもない。無形質料においては、見られたり知覚されるものは存在しないからである¹⁶⁾。アウグスティヌスの精神は、形相づけられた物体の諸心象に満たされ、それらを思いのままに動かしたり変化させたりするような自分の心 *spiritus* から、物体の可変性へと注意を向け変えた。そして物体の生成消滅を一層深く観察 *inspicere* して、まさに或る形相から別の形相への推移が、何か無形のものによって生ずるのであって、全くの無によって生ずるのではないと推量した¹⁷⁾。

無形質料を理解するために、この可変性の概念は重要な契機である。変化とは可变的なものが或る形相から、別の形相へ推移することである。従って可变的なものに属する可変性は、あらゆる形相を受容 *capax* できなければならない。そのような可変性そのものは、精神ではなく、物体でもなく、また精神や物体の形相でもない。あらゆる可視的で整えられた形相を受け取る、いわば形相づけられうる基体、受皿として

何らかの仕方では存在しているが、あらゆる形相を欠いた「無である何ものか」、「あってないもの」である¹⁸⁾。

かくして全ての可變的なものは、その可變性の根拠としての或る無形のものから形成されている。そしてどんな自然物の質料も神によらなければ存在しえない。神は形成されているもののみならず、形成されるべき全てのものの創始者、創造主である。凡そ存在するものは全て存在するかぎり神によって存在する。従って神は無から無形質料を造り、無形質料から全てのものは造られた¹⁹⁾。

神は天地を無から造った。神は被造物を造る際、神以外の何か別のものから造ったのではない。というのも神が存在し、他のものは無であった。しかるに神は天地を神から *de Deo* 生ずるといふ仕方では造ったのではない。さもなければ、天地は神の独子と等しくなり従って三位一体なる神と等しくなる。それ故被造物は神によって *a Deo* 無から造られた。被造物の本性的起原は神ではなく、無である。

さて無形質料はあらゆる形相を欠くのであるから、そこに変化は認められない。何故なら変化とは形相が変化、転変すること、即ち可變的なものが或る形相から別の形相へ推移することだからである。従って無形質料は時間の変遷を示すことはできない。何故なら運動の変化なしには時間は存在せず、如何なる形相もないところ即ち無形質料においては如何なる変化もないからである。

以上の如く「天の天」と「無形質料」との規定から、三位一体なる神と無にはさまれて、天と地という二つのものが存在する。前者は神に最も近く、後者は無に最も近い。そしていわば両者にはさまれて、この時間的世界²⁰⁾が成立する。

IV 「はじめに」と「天地」との解釈の相関関係

さて今述べた無形質料は、形相づけられたものに対して時間的に先立つのではない。両者は同時に造られた。それはちょうど音声と言葉との関係の如くである。実際音声は言葉の質料であり、言葉は音声がかたちづけられたものである。人が無形の音声を発し、そこから言葉は形成される。このことのアナロジーによって、無形質料はそこから生じる形成されたものに対して、時間的にはないが、起原において先立っていることが理解される。それはもとより神によって造られたが、形相づけられたものと同時に、共に造られたという仕方では存在する²¹⁾。

それ故『創世記』冒頭の「はじめに」を「第一に」*primo (omnium)* と解釈する

説は、引き続き「天地」に関して「可知的、物的全被造物の質料」を意味表示していると解さなければならない。『告白』XII 卷第29章40節によると、もし第一に神が既に形相づけられた全被造物を造ったと理解しようとするならば、全被造物を神が造ったことになる。さすれば「次に」*deinceps* 神は何を造ったのかと当然尋ねられる。しかし全被造物の後に何も見い出せないから、後に何もなければ、それが「第一に」と言われることは不合理である。

それ故「第一に」無形質料を、「次に」形相づけられた質料を神は造ったと言うならば、その説は不合理ではない。その場合無形質料が形相づけられた質料に先立つ *praecedere* 故に「第一に」そして「次に」という順序が成立するからである。この「先立つ」ということの意味は重要である。アウグスティヌスはその意味を四つに区分しているが、その内「永遠において先立つ」場合と「起原において先立つ」場合の二つが理解しがたいと表明している。

「永遠において先立つ」とは、神が全被造物に先立つ場合のみが考えられる。そして「起原において先立つ」とは、例えば音が歌に先立つ場合、即ち質料が形相づけられたものに先立つ場合である。前者に関しては『告白』XI 卷の主題であり、「はじめに」*in principio* を「時間の始めに」と解釈する立場に深く関わっている。そして後者に関しては『告白』XII 卷の主題であり「はじめに」を「第一に」と解釈する立場に深く関わっている。この『告白』XII 卷の最後に到って、『創世記』冒頭の「はじめに」を「時間の始めに」と解釈する説と「第一に」と解釈する説との内実にとって最も重要な区別をアウグスティヌスは端的に語っているといえよう²²⁾。

即ち更に先の「はじめに」と「天地」との解釈の相関関係を考える作業を推し進めていくと、「はじめに」を「時間の始めに」と解した場合、引き続き「天地」はどのように理解するべきか。一連のアウグスティヌスの議論に即せば、もし時間の始めに神が天地を造ったとするならば、天地を、霊的であれ物的であれ無形質料の意味に解することも、また至福の霊的被造物と解することも矛盾である。即述の如くそれらのものは、いずれも時間的変遷を示さないから、そのようなものを時間の始めに造ったということとはできない。実際時間は被造物と共に始まるが、その被造物が時間的変遷をしないならば、それと共に時間が存在し始めることはできないのである。それ故「はじめに」を「時間の始めに」と解する場合、「天地」の名の下に、既に形相づけられた何らかの物的被造物が意味表示されていると理解しなければならない。

かくしてアウグスティヌスが「天地」の解釈として容認した(1)霊的、物体的被造物(全被造物)、(2)物体的被造物、の説は「はじめに」を「時間の始めに」と解釈する説と整合的であり、また(3)霊的、物体的被造物の無形質料、(4)物体的被造物のみの無形質料、の説は「第一に」と解釈する説と整合的である。するとアウグスティヌス自身が『告白』XII 巻で積極的に主張していると思われる(5)霊的被造物(天の天)と物体的被造物の無形質料、の説はそのいずれともそぐわない²³⁾。それ故残る「御言たる始原において」と解釈する立場は、この(5)説を主張するアウグスティヌスの内に、いかなる新しい視点を与えているのか。端的に言えば、創造主と被造物といういわゆる存在の絶対的依存関係に加えた、神の召命 *uocatio* に対する被造物からの働きである²⁴⁾。

V 「はじめに」を「御言たる始原において」と解釈する説

さて『告白』XIII 巻及び『創世記逐語註解』I 巻に到ると、被造的世界において確固たる位置を占める霊的被造物の質料即ち霊的質料であるが、『告白』XII 巻の記述においては、固有に霊的質料を考察の対象にした記述は見られない。そもそも「霊的被造物」という言葉自体『告白』XII 巻第17章24節以降の一連の、アウグスティヌスが他者の説として紹介している中で、登場する。そして霊的質料は或る意味で被造界を霊的、知性的被造物と物体的被造物とに大別し、形相と質料という観点を導入すれば必然的にでてくる概念とも考えられる。しかしながら『告白』XIII 巻以降、自らの言葉としてその内実を与え、被造界の存在の秩序の中で確固たる位置を与えているところにアウグスティヌスの独自性があると考えられる。

従って次に本論の冒頭で述べたようなアウグスティヌスによる霊的質料の理解及び被造界の存在の秩序を完成すべく御言と霊的被造物との関係づけの契機として、一連のテキストの流れから、『告白』XI 巻の時間論の最終部と XII 巻の天の天の至福論が果たした役割を考察しよう。

時間論の最終部において、我々が知覚し測る時間は、現在の精神の働き、即ち「期待」と「直視」と「記憶」において見い出された。しかも直視を中心に期待と記憶に向かっている *tendere* この精神の働きの生が分散 *distendere* である²⁵⁾。

そして時間論の最終章に到って、時間を測る精神の働きとしての分散は、人間の生の分散となるのである。即ちその分散とは、人間の生の分散されている状態として人

間の悪しき在り方を示すのである²⁶⁾。我々の精神の働きたる分散として捉えられた時間は、ここで我々の精神、生との関わりにおいて見出される時間となるのである。アウグスティヌスが時間論を展開した目的の一つは、我々の魂をも含めた時間的被造物の在り方を見極めることであつたと思われる。

しかるに神の憐れみ *misericordia* はそのような人間の生を越えてはるかに善い。しかも神は仲保者イエス・キリストにおいて、分散された多なる状態の我々人間を支えた *suscipere* のである。それは我々が仲保者を通して神を尋ね、捉える *adprehendere* ためである。即ち多に分散されている我々が一つに集められ *colligi*、一なる神に従う *sequi* ためである。

それ故、来たり去ったりする時間的なものどもへ分散されるのではなく、眼前にある *ante esse* ものへ分散 *distentio* ではなく集中 *intentio* によって、超出 *extendere* されて、天上の呼びかけの声を我がものとするように追い求め *sequi* しなければならない。そこにおいては讚美の声を聞き、来たり去ったりしない神の喜びをながめる *contemplare* のである。そして神において、己れの完全な在り方において *in forma mea*、神の真理において、立ち止まり固められるのである²⁷⁾。

このアウグスティヌスの時間論における至福論（或いはむしろ自己の悲惨さの自覚と言うべきかも知れないが）においては、己れの生の見極めと共に、己れの完全な在り方 *forma mea* の範型を、御言たるイエス・キリストの完全な在り方において、持っているという確信が存している。既述の如くアウグスティヌスが靈的質料を認め、被造界全体を四つに区分し秩序を与え、靈的被造物と御言とを関係づけるに到った経緯には、この確信こそが不可欠であつたと思われる。

Ⅵ 結 論

即ちアウグスティヌスは被造物の存在の秩序を構築する際、一方で可感的形相と可知的形相とを区別し²⁸⁾、また質料は形相が推移する変化の基体、受容性として考えながら、物体的被造物と靈的被造物とをパラレルに論じ、両者をいずれも形相・質料という説明原理によって存在論的に基礎づけている。ところが他方、物体的被造物と靈的被造物とを存在の秩序にしたがって上位と下位に位置づける時、両者の形相・質料用語は一義的に理解されえないと思われる。両者の在り方は上位と下位に秩序づけられ、根本的に異なっているからである。

それ故靈的被造物にも形相・質料用語を適用するアウグスティヌスにとって、その質料は、無から造られたものとしての被造物の本性的起原の無形性即ち無形の本性を意味表示することに力点が置かれると共に、形相は、被造界の存在の秩序の中での固有の在り方を規定するものとして用いられている。そして靈的被造物は、その確固たる形相（完全な在り方）を御言の完全な在り方に依っており、それに向き直るという仕方で形相づけられ、御言の下位に秩序づけられているのである。

アウグスティヌスは靈的被造物に形相・質料用語を適用することによって、可變的ではあるが非時間的な至福の靈的被造物の在り方をも被造界の存在の秩序の中で位置づけるとともに、御言と靈的被造物とを関係づけ、『創世記逐語註解』に到る重要な視座を獲得している²⁹⁾。ここに『未完の創世記逐語註解』から『創世記逐語註解』への発展の契機があり、その過渡期にあたる『告白』で論じられた『創世記』解釈の意義が認められる³⁰⁾。

註

De Gen. cont. Man. = *De Genesi contra Manichaeos* (388-390)

De Gen. lib. imp. = *De Genesi ad litteram, liber imperfectus* (393-394)

Conf. = *Confessiones* (397-c.400)

De Gen. ad litt. = *De Genesi ad litteram* (401-)

- 1) *Conf.* XIII, 5, 6.
- 2) *De Gen. ad litt.* I, 1, 2.
- 3) *Ibid.*, I, 1, 3.
- 4) *Conf.* XIII, 3, 4.
- 5) *De Gen. ad litt.* I, 4, 9.
- 6) *Conf.* XIII, 2, 2.
- 7) *Ibid.*, XIII, 4, 5., *De Gen. ad litt.* I, 5, 10.
- 8) *De Gen. lib. imp.* 3, 6; Est enim Principium sine principio, et est Principium cum alio principio. ...Ipsa etiam prima creatura intellectualis potest dici principium iis quibus caput est, quae fecit Deus.ita Creatori creatura subnecitur. ここでは始原の意味が問われ、父から下位の被造物まで、いわば始原の連鎖によって被造物は創造主の下位に結びつけられるといわれている (cf. *Conf.* XI, 8, 10.).
- 9) *Conf.* XII, 15, 19-20.
- 10) *Ibid.*, XII, 15, 21.

- 11) *Ibid.*, XII, 11, 12.
- 12) *Ibid.*, XII, 13, 16.
- 13) *Ibid.*, XII, 15, 21.
- 14) *Ibid.*, XII, 15, 21.
- 15) *Ibid.*, XII, 3, 3.
- 16) *Ibid.*, XII, 5, 5.
- 17) *Ibid.*, XII, 6, 6.
- 18) *Ibid.*, cf. Plotinus, *Enneades* II, 4, 1-2.
- 19) *De Gen. cont. Man.* I, 6, 10; Et ideo Deus rectissime creditur omnia de nihilo fecisse, quia etiamsi omnia formata de ista materia facta sunt, haec ipsa materia tamen de omnino nihilo facta est.
- 20) *Conf.* XI 巻によれば時間は客観的には存在しない。それ故正確には時間的認識の対象となる世界と言うべきである。そして XII 巻において、新たに質料・形相という説明原理を与えることにより、被造界全体の像をより立体的に浮かび上がらせているといえよう。
- 21) *Conf.* XII, 29, 40., *De Gen. ad litt.* I, 15, 29.
- 22) *Conf.* XII, 29, 40. 「はじめに」の解釈において「第一に」という解釈 (*De Gen. cont. Man.*, *De Gen. lib. imp.* においては見いだされない) の下で質料・形相の観点を導入することによって、聖書の記述の順序が時間的な経過の順序ではないということの有力な論拠となっている (*De Gen. ad litt.* I, 15, 29.)。それはまたマニ教徒の誹謗 (*De Gen. cont. Man.* I, 3, 5.) に対して『創世記』の記述を擁護することになる。その意味で「時間の始めに」という解釈と共に、アウグスティヌスの『創世記』冒頭の解釈は当初のマニ教徒論駁という意図が貫かれている。
De Gen. cont. Man. I, 3, 5; Quod autem sequitur in libro Geneseos, *Terra autem erat invisibilis et incomposita*, sic reprehendunt Manichaei ut dicant: Quomodo fecit Deus in principio coelum et terram, si jam et terra erat invisibilis et incomposita?...
- 23) 「天地」の解釈 (○はアウグスティヌスが容認している箇所)

	<i>Conf.</i> XII 17, 24-25.	<i>Ibid.</i> 20, 29.	<i>Ibid.</i> 21, 30.	<i>Ibid.</i> 28, 39.	<i>De Gen. ad litt.</i> I 1, 2-3. 3, 7.	<i>Ibid.</i> 4, 9.	<i>Ibid.</i> 9, 15.
(1)説	○	○	○	○	○	—	—
(2)説	○	○	○	○	○	—	—
(3)説	○	○	○	○	○	—	○
(4)説	○	○	○	○	—	—	—
(5)説	—	—	—	○	○	○	—

Conf. XII 卷におけるアウグスティヌスの解釈を(5)説と特定することには異論があるかも知れない。当初の彼の主張は「天」は「天の天」, 「地」は「無形質料」とするものである。(特に物的被造物の質料とは言っていない。)しかしその後、質料の考察の対象として物体に目を転じていること、第17章24節以下の他者の説の紹介において、(5)説が欠落していることから(但し第28章39節は例外)、さしあたり *XII* 巻の時点でのアウグスティヌスの主張と見なすものである。もとより一つの解釈に雌雄を決することはアウグスティヌスの本意ではないが、「天地」の解釈に関して次のような規準が働いていると思われる。1) 「天地」の名の下に、何らかの意味で全被造物が意味表示されている=(1)説。2) 「天地」の無形質料もまたいわば天地の種子として「天地」と呼ばれる (*De Gen. cont. Man. I, 7, 11.*)=(3)説。3) 靈的被造物については語られていないとも考えられる=(2), (4)説。そして(5)説の *caelum caeli* 説は従来プロティノスの要素とキリスト教的要素の総合として指摘されている (*Bibliothèque Augustinienne, Oeuvres de Saint Augustin*, <以下 *BA* と略す。> vol. 14, *Les Confessions*, notes pp. 592-598, par A. Solignac, Paris, 1962). *caelum caeli* の存在論的構造に関して、天使の形成、認識の問題と共に *Conf. XII* 巻から、*XIII* 巻及び *De Gen. ad litt.* へとアウグスティヌスの考えが発展、深化されていく。その過程を P. Agaësse と A. Solignac は J. Pépin を批判しながらアウグスティヌスの解釈の修正 *modifications* (即ち(5)説から(3)説)があると指摘する (*BA*, vol. 48, notes pp. 581-588. Paris, 1972). しかし「光」(*Gen. 1, 3.*)の解釈からただちに「天」(*Gen. 1, 1.*)の解釈をアウグスティヌスが修正したとテキストからは読めない (e.g. *De Gen. ad litt.*, I, 3, 7., 9, 15., III, 1, 1. をどう理解するか.). 聖書の記述の順序には別の秩序を考える余地もあるし、何より *Conf. XII* 巻における他の解釈への配慮, *De Gen. cont. Man.* 以来の問題意識を含めてキリスト教的要素の観点から見ると、殊更解釈の修正と強調する必要はないと思われる。

- 24) *De Gen. ad litt. I, 4, 9.*
- 25) *Conf. XI, 28, 37.*
- 26) *Ibid.*, XI, 29, 39. Cf. 山田晶アウグスティヌス『告白』(「世界の名著」16 中央公論社 1978年) p. 435 註(4).
- 27) *Conf. XI, 29, 39.*
- 28) *Ibid.*, XII, 5. 5.
- 29) 具体的な例として、天使による下位の被造物の認識及び非時間的 *conuerti* の問題がある。
- 30) 『創世記』の冒頭に靈的被造物の創造を読み込む試みは既に *De Gen. lib. imp.* (3, 7-8.) において見いだされる。そこでは天使が造られたのは 1) 時間において、2) 全ての時間に先立って、3) 時間の始めに、かという問いを立てている。即ち時

間という観点でのみ天使の在り方、更には認識について論じ、未解決のまま残されている。従ってここにも *Conf. XII* 巻において、形相・質料という観点を導入したことの意義が認められる。このようにアウグスティヌスにとっては、『創世記』解釈という作業の下で、人間の魂をも含めた霊的被造物の至福の在り方を考察することが *De Gen. lib. imp.* 以来の一貫した課題であった。そしてまたその点に『告白』という書物のモチーフとの接点が認められる。